産　業

1　農業（リンゴ）
2　農業（その他の農作物）
3　畜産業
4　林業
5　水産業
6　鉱業
7　商業
8　工業

1　農業（リンゴ）

①リンゴ栽培の始まり

明治２（1869）年、開拓使の顧問ケプロンは、「リンゴは温帯のみならず、北海道のような寒地でも良く育つ」と、開拓使に果樹栽培を勧めました。これを受けて、開拓使は、明治５（1872）年、アメリカから、リンゴ、ナシ、ブドウなどの果樹の苗木を輸入しました。同７（1874）年には、その苗木をもとに、開拓使本庁舎内に果樹園（札幌官園）が設けられました。これが札幌における果樹栽培の始まりです。

②栽培の中心であった平岸のリンゴ

区内でリンゴの栽培が一番盛んだったのは、平岸です。札幌官園で育てられた苗木が明治８（1875）年に道内各地に配られ、平岸には 425 本のリンゴの苗木が配られました。明治 17（1884）年ごろには、本格的なリンゴ栽培が始まり、多くのリンゴ園が誕生しました。明治 30 年代までは、平岸をはじめとする北海道のリンゴ生産量は、青森県を上回っていました（現在は青森県が最も多い）。しかし、リンゴ園の面積が増えたり、木が古くなったりすると、病気や害虫などが発生するようになりました。このため、中には、果樹を伐採し、廃園に追い込まれたところもあったようです。

③品質の改善に挑む

大正時代になると、天候不良によって不作となる年が多かったため、平岸では、道からの技術指導を受けたり、組合を組織したりするなどで栽培方法の研究や講習を行い、品質の改善に努めました。昭和 10（1935）年には、一念発起した青年 10 人が、リンゴ栽培の先進地青森県弘前市の果樹園で、１年間、栽培方法を学びました。

そうして、青年たちは新しい技術を身に付け、平岸のリンゴの質を向上させることに成功したのです。

④世界に進出した平岸リンゴ

写真 -1　平岸にあったリンゴ園（昭和 10 年ごろ）

昭和 11（1936）年ごろになると、平岸のリンゴはシンガポールにまで輸出されるようになり、「平岸リンゴ」や「札幌リンゴ」の名で親しまれました。また、同じころ、収穫後長い間保存ができるレンガの倉庫が作られました。こうして、リンゴが出回らなくなる時期にも、平岸のリンゴは出荷できるようになりました。

⑤リンゴ栽培の衰退

病気や害虫、天候不良など、多くの困難を乗り越えてきたリンゴ栽培も、都市化の波には勝つことができませんでした。宅地化の進行や道路整備、昭和 46（1971）年の地下鉄の開通などにより、リンゴ園は次々と姿を消していったのです。

⑥リンゴの歴史を後世に

写真 -2　第１回リンゴまつり（昭和 51 年）

現在は、昔のリンゴ園の名残として、リンゴ倉庫が区内にいくつか残っています。また、リンゴの栽培の中心地であった平岸の天神山緑地には、昭和 41（1966）年 10 月、消えていったリンゴの歴史を後世に伝えようと、石川啄木の歌が刻まれた「平岸林檎園記念歌碑」が建てられました。また、昭和 49（1974）年 11 月には、「街

路樹に実の成る木を植えて、街並みに彩りを添えよう」との当時の板垣武四市長の提案により、美園地区の環状通中央分離帯にリンゴ並木が完成しました。この並木沿いには、「りんご並木の碑」も建てられています。

そして、昭和 51（1976）年には、リンゴの栽培を通じて培われた不屈の精神をたたえ、ふるさとを大切にする心を未来に伝えようと、「豊平区民のつどい第 1 回リンゴまつり」が盛大に行われました。この祭りは、平成 11（1999）年まで 24 回にわたって続けられました。

2　農業（その他の農作物）

農地が広がっていた豊平町では、各地で、米のほか、ジャガイモ、麦類、豆類、トウモロコシ、ソバ、ホップ、ビートなどの野菜、ナシやイチゴといった果実など、多くの種類の作物が栽培されました。

度重なる風水害や病虫害に耐えて発展し、都市化の波にのまれ衰退していった豊平の農業。ここでは、その中から、ジャガイモとホップに焦点を当て、移り変わりをたどります。

①ジャガイモ

食用のジャガイモは、明治時代から栽培されており、現在の西岡や福住、月寒などに広がっていた畑で生産されたイモは、海外に輸出されるほどになりました。

大正末期に、関西の会社から豊平町農会に、種イモとして、「メークイン」の注文がありました。しかし、当時はそれがどのような品種かということがわからず、一度は断った後、再度の要請に、その時栽培していたロシアイモを送りました。すると、翌年、同じ会社から、「今年は本物のメークインを送ってほしい」という依頼があり、たまたまその年から西岡地区で栽培が始まったメークインを送ることができたのです。これを機に、種イモの出荷が軌道に乗り、高価格のメークインの生産量は増加し、「豊平薯」として有名になりました。

写真 -3　種バレイショの出荷風景（年代不明）

戦時中にはジャガイモの出荷が制限され、終戦時には、ほとんどの品種が生産されなくなっていました。戦争が終わると、「豊平薯」を復活させたいという声が高まり、昭和 22（1947）年には、栽培技術の向上を目的として、「豊平馬鈴薯採種組合」が結成されました。この組合では、病虫害の克服などに取り組み、再び種イモの栽培が盛んになりました。

しかし、その後、急速な都市化の進行に伴って、住宅街でジャガイモ栽培を続けていくことは、徐々に難しくなっていきました。区内の種イモの生産は平成 9（1997）年を最後に中止され、現在では、わずかに食用のジャガイモ栽培が行われているだけになっています。

②ホップ

ビールの原料となるホップは、明治時代に平岸や西岡などで栽培が始まりました。当時のビール会社は、当初、札幌の山鼻に直営のホップ園を設けてホップの栽培を始めましたが、それだけでは間に合わなくなったために、昭和初期には札幌近郊の農家と次々と契約を結び、平岸や西岡でも契約農家が増加しました。

写真 -4　平岸にあったホップ園（昭和 36 年ころ）

戦後、ホップの生産量は急速に減少しましたが、昭和 36（1961）年には、当時の日本麦酒株式会社（現在のサッポロビール株式会社）直営の西岡ホップ園が設置

され、昭和 48（1973）年まで栽培が続けられました。

また、平岸付近でも昭和 40 年代半ばまで、ホップ園が開設されており、丈が高く、つぼみ状の花を付ける独自の外観のホップを見ることができました。

3　畜産業

①牛

開墾当初は、土地も肥沃で作物が豊かに育っていました。しかし、毎年十分な肥料をやらなかったため、明治の終わりごろになると土地がすっかりやせてしまいました。そこで、堆肥を確保する目的からも、各農家に牛や馬などの飼育が広がりました。

写真 -5　黒澤牧場（昭和 36 年ごろ）

月寒で初めて乳牛を飼ったのは、阿部牧場です。創立は明治 20（1887）年ごろで、当時豊平川河畔に住んでいた阿部与之助氏が、現在の北海道大学や真駒内種畜場から牛を譲り受けて飼育を始めました。また明治 40（1907）年ごろから、二里塚（現在の東月寒）では、嵯峨牧場が乳牛を飼育していました。

明治 39（1906）年には、二里塚に農商務省月寒種牛牧場（所在地は現在の北海道農業研究センター）が設置され、事務所、畜舎の建設に多くの人が集まってきました。ここで働く人たちの勧めや、畜牛に熱心な人が多かったこともあり、大正から昭和にかけて、吉田、富森、高島、木村、高倉、黒澤、奥野などたくさんの牧場が開かれました。

②馬

馬は、畑を耕したり、馬車や馬そりを引いて重いものを運んだりと、いろいろな場面で重宝されました。また、農家で飼っていた農耕馬は、定山渓方面の山で伐採された木材の運搬にも使われていました。戦時中は、農耕馬も軍の要請によって、戦地に送り出されることもありました。しかし、戦争が終わると、徐々に農耕が機械化され、馬を飼育する農家が少なくなっていきました。

③養豚

豊平町で、養豚が盛んになるのは、大正末期から昭和の初めにかけてです。豚の飼育を、農業の副業としてばかりではなく、専業とする人も多かったようです。それは、畜産試験場北海道支場（後の北海道農業研究センター）や、真駒内種畜場が近くにあり、ここから貸し付けられた豚を飼育したり、技術的指導を受けたりすることができたためです。

写真 -6　月寒にあった養豚場（昭和 4 年ごろ）

飼育はそれほど手がかからず、飼料はジャガイモのくずや、しょうゆかす、でん粉かすなどが主でした。また、軍隊から出る残飯も利用されたそうです。ふんは肥料となり、畑の生産力を高める役割を果たしました。

④養鶏

養鶏は、明治 10（1877）年ごろから手がける農家が多くなってきたといわれています。中の島では、大正の末ごろから、300 ～ 500 羽の鶏を飼っている人たちがいました。その後、昭和 12（1937）年に北見から移住してきた志賀滝太郎氏が、1,000 羽余りの鶏とともに、当時中の島にあった

養鶏場の後を継ぎました。その後も、数百羽の鶏を引き連れて、由仁や長沼から移住し、養鶏場を経営する人たちが現れ、採れた卵は、主に札幌の小売店などに卸(おろ)していました。現在の中の島１条３丁目から豊平川にかけては、卵を買いに来る人たちや、鳥料理を食べに来る人たちでにぎわっていたため、「とり屋町」と呼ばれていたそうです。

しかし、戦時中は、えさの不足や病気の流行により、たくさんの鶏が死んでしまいました。そのため､鶏を飼うことが難しくなり､中の島から次々と養鶏場がなくなっていきました。

⑤綿羊(めんよう)

明治 40（1907）年ごろから、月寒種畜牧場では、綿羊の飼育が行われていました。

終戦後は、衣料を手に入れるのが難しい時代があり、そのころから、綿羊を飼育する農家が増えてきました。昭和 20（1945）年には、北海道農業試験場（現在の北海道農業研究センター）から各農家に３頭貸し付けられ、１年間飼育するとそのうち１頭がもらえました。それからほとんどの農家で１～６頭の綿羊を飼育するようになり、刈り取った毛は各農家で毛糸にして、衣服を作っていました。

⑥八紘(はっこう)学園

学校法人八紘学園北海道農業専門学校（月寒東２条 14 丁目）は、国内外の農業の発展のために働く青年を育てることを目的に､昭和２(1927) 年に設立されました。戦後は、何度か名称を変えて、昭和 51（1976）年に現在の名称になりました。教育課程は２年制で、１年次に農業全般の基礎知識と農具・農業機械操作などを身に付け、２年次になると、畜産・園芸の２コースに分かれ、それぞれ専門知識と応用技術を深めています。

写真 -7　八紘学園の牛舎（昭和 52 年）

写真 -8　一面に咲き誇る花ショウブ（平成 16 年）

また、学園の中には有名な花ショウブ園がありました。これは、昭和 30 年代に八紘学園の創始者、栗林元二郎(くりばやしもとじろう)氏が、東京より数株の花ショウブを持ち帰ったことから始まり、２ヘクタールの敷地に約 450 品種 10 万株を栽培する、日本でも有数の花ショウブ園として知られていました。

⑦北海道農業研究センターとさっぽろ羊ヶ丘展望台

明治 39（1906）年、二里塚に「農商務省月寒種牛牧場」が設置され、乳製品の作り方や羊毛や毛皮の利用方法など、酪農に関する研究を行っていました。その後、「月寒種畜牧場」、「畜産試験場北海道支場」などと名称を変え、昭和 24（1949）年に「北海道農業試験場月寒試験地」となりました。

翌 25（1950）年には､琴似にあった農業の研究施設「北海道農業試験場」と合併したため「北海道農業試験場畜産部」となりました。

昭和 41（1966）年には、すべての研究施設が羊ケ丘に集まり、平成 13（2001）年に独立法人化し「農業技術研究機構　北海道農業研究センター」に再編されました。

写真 -9　羊ケ丘に放牧されている羊（昭和 35 年）

その後、平成 27（2015）年に「農業・食品産業技術総合研究機構　北海道農業研究センター」となり、北海道地域における農業や畜産の発展に必要な研究を行っています。

また、昭和 34（1959）年には、ここの一角にさっぽろ羊ヶ丘展望台が完成しました。クラーク博士像をはじめとする札幌ゆかりのモニュメントやレストハウス、チャペルなどが整備され、道内有数の観光名所として親しまれています。

⑧北海道立産業共進会場

「月寒グリーンドーム」の愛称で呼ばれた同施設は、家畜共進会の開催を目的として造られ、昭和 47（1972）年に開業しました。北海道農政部の所管で運営され、日本初の総合畜産共進会場として、4 年ごとに開かれる「北海道総合畜産共進会」や競走馬の競り市といった畜産関係の催事の他、スポーツやコンサートなど各種イベントにも使用されました。

昭和 57（1982）年には北海道博覧会が開催され、およそ 268 万人の来場者が訪れるなど好評を博しました。

平成 28（2016）年に、施設の老朽化や北海道立総合体育センター（北海きたえーる）、札幌ドームなどの大規模イベントが開催できる屋内施設が完成したことからその役目を終えました。

施設解体後の土地には、大型商業施設が造られた他、展示・見本市会場の整備が計画されています。

4　林業

豊平村に住んでいた阿部与之助氏は、明治 30（1897）年、精進川沿いに 130 町歩（約 129ha）の地を選定して、大掛かりな植林を始めました。この場所は阿部造林地と呼ばれ、大正元（1912）年に北海道の模範林として、大日本山林会から有功章が贈られました。

豊平町時代は、現在の南区にある簾舞、盤の沢（現在の常盤）、定山渓、

白井川などに御料林と呼ばれる国有林がありました。そこでは、夏は植林、冬になると伐採が行われ、馬そりに積まれて山から里に運び出されました。昭和の初めのころからは、この木材の搬出に、西岡に住む多くの農家が従事したようです。冬の間の収入を得るため、農民たちは、この仕事に自分たちの馬を連れて参加したといわれています。

写真 -10　伐採の様子（明治時代）

また、明治時代の中ごろ、札幌で木材屋をしていた遠藤石太郎氏は、営林署の払い下げを受けて、定山渓の山の木を切り出しました。伐採された木は、豊平川の流れを利用して運び、現在の中の島 1 条 11 丁目あたりから精進川に送り込まれ、中の島 1 条 1 丁目・2 条 1 丁目付近で受け止められました。

川から引き上げた木材は、現在の水産研究・教育機構札幌庁舎から土木研究所寒地土木研究所の辺りに、5 ～ 6m の高さで、何カ所にも積み上げられていました。この付近は土場（木材置き場）と呼ばれ、多いときにはここで 200 ～ 300 人ほどの人が働いていたそうです。この木材は、馬車に積まれて札幌や小樽、また旭川をはじめとする道内各地に運ばれ、主に建築用に使われました。

大正 7（1918）年になると、定山渓鉄道が開通し、鉄道で木材が運び出されるようになったので、川を使った運搬は行われなくなりました。

豊平地区には定山渓鉄道によって運び出された木材が集まり、地区の発展に大きく貢献しましたが、昭和初期の不況や戦争の影響を大きく受けました。戦後になると、混迷の中から立ち上がり、昭和 30 年代には、高度経済成長の波とともに、大きく成長しました。しかし、二度のオイルショック（昭和 48 年と 54 年）による不況と、低価格の外国産木材の輸入、都市化などの影響で、次々に撤退と廃業に追い込まれました。

コラム：北海道林業試験場

昭和 15（1940）年、豊平に帝室林野局（ていしつりんやきょく）の北海道林業試験場が創設されました。昭和 22（1947）年には、内務省所管の北海道林業試験場（現在の江別市野幌にあった）と豊平の林業試験場が合併して、林業試験場札幌支場が誕生し、その後林業試験場北海道支場と改称されました。

昭和 49（1974）年に、この施設は羊ケ丘に移転し、その後森林総合研究所と改称され、平成 13（2001）年 4 月には独立行政法人森林総合研究所北海道支所となり、平成 29（2017）年に国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所北海道支所となっています。

豊平にあった林業試験場の跡地は、現在、豊平公園（豊平 5 条 13 丁目）や温水プール、みどり小学校になっています。この辺りは試験林が植えられていたので、木々が多く残っています。

写真 -11　昭和 49 年の庁舎移転まで使われていた豊平の林業試験場北海道支場

5　水産業

北海道さけ・ますふ化場

写真 -12　水産庁北海道さけ・ますふ化場（昭和 63 年）

豊平区の水産業は、豊平川をさかのぼってきたさけ・ますや、小魚を捕まえるといった程度のものでした。しかし、中の島に「北海道さけ・ますふ化場」がありましたので、これについて紹介します。

「さけ」は、古くから北海道の代表的な水産物で、現在よりもはるかに貴重なものでした。しかし、産卵のために川をさかのぼる親魚を取ると資源が減るということを知らずに、大量に捕獲（ほかく）したり、川の漁業権を争って漁を行ったりしていたところもあったようです。

日本がアメリカから人工ふ化の方法を学び、やがて、それが北海道に根付くのは、明治 10（1877）年以降になります。明治 21（1888）年には、千歳村（現在の千歳市）に官営の「千歳中央ふ化場」が設立されました。明治後期から大正にかけては、全道各地にふ化施設が設けられ、河川内における親魚の捕獲禁止と併せて、さけ・ますの増殖は人工的に管理されるようになりました。

その後、昭和 9（1934）年に、北海道千歳鮭鱒孵化場を北海道鮭鱒孵化場と改称して本場とし、他に 4 支場設置するとともに、民営のふ化場を国営としました。昭和 11（1936）年には、本場が中の島に移転し、千歳は事業場となりました。昭和 27（1952）年に水産庁北海道さけ・ますふ化場となり、道立水産ふ化場が併置。本場となった中の島では、精進川の水を利用して、さけ・ますのふ化を行っていましたが、昭和の中ごろからふ化事業は行わなくなりました。

ふ化場は、平成９（1997）年にさけ・ます資源管理センターへ改組。平成 13（2001）年には、独立行政法人へ移行し、平成 18（2006）年に独立行政法人水産総合研究センターと統合し、さけますセンターとなりました。その後、平成 23（2011）年に北海道区水産研究所と統合。令和２（2020）年、水産研究・教育機構札幌庁舎に再編されています。

6　鉱業

幻の油沢油田

西岡に油沢と呼ばれているところがあります。

かつて、この沢では濃い緑色をした油がブツブツと湧き出ていました。西岡の開拓は、明治 22（1889）年ごろから行われましたが、それより前の明治 16（1883）年には、すでに油田を掘り当てるための井戸が作られたといわれています。そのころから、このあたりは「油沢」と呼ばれるようになりました。西岡だけでなく、福住や澄川からやって来て、ここから出る油をわらに染み込ませ、缶に入れて持ち帰り火種や灯油の足しに使ったり、馬車の心棒の潤滑油として利用したりしていたという話も残っています。

写真 -13　油沢の石油試掘現場（昭和９年）

明治 23（1890）年、27（1894）年にも、油田を掘り当てようとする人たちが、採掘を行うための申請を出しています。

明治 30（1897）年 11 月 14 日付の小樽新聞では、油沢で取れる石油を「礦油質は善良にして重に機械使用に適するものなる由」と伝え、ここに資本金８万円の会社設立が計画されていると記しています。しかし、この計画はまもなく中止となり、その活動の跡は残っていません。また、

昭和９（1934）年から２年続けて試掘が行われましたが、油層の発見は失敗に終わっています。

昭和 32（1957）年 10 月ごろには、石油資源開発株式会社が現地調査を行い、11 月には、高さ 40m の鉄塔と 250 馬力のモーターを据えてボーリング作業を開始しました。当時、新鋭の機械と調査技術をもって行われた掘削は、地下 2,000m にも達したそうです。しかし、自噴するほどの油層を発見することはできないまま作業は中止となりました。

現在、油沢に通じる水源池通沿いの西岡３条 13 丁目には、平成元（1989）年に建てられた「油沢の坂」の石碑があります。これは、坂の多い西岡で、地元の人たちが愛着心を持てるようにと７カ所の坂を選び、その坂道の歴史にちなんだ名称をつけ、後世に残そうとしたもののうちの一つです。

写真 -14　「油沢の坂」の石碑

7　商業

豊平区は、もともと農業を中心に発展してきた街ですが、札幌の中心部に近い豊平地区には、商業や製造業で生計を立てた人が多くいました。また、軍の駐屯地であった月寒地区には、区内でもっとも早く商店街ができ、平岸通沿いにも、昭和になってから発展した大きな商店街が形成されています。

①豊平地区

豊平地区は、室蘭街道（現在の国道 36 号）や定山渓鉄道が通るなど、古くから交通の要衝として発展してきた街です。昔の人たちは、馬を交通機関として利用していたので、街道沿線には、馬車や馬そりの道具を扱う

馬具屋や蹄鉄屋が多いという特徴がありました。その他に、くわ、かま、なたなどの農機具を作る鍛冶屋や精米所、雑穀店も軒を連ねていました。また、札幌に泊りがけで来る人たちが利用した宿屋や日用品などを扱う雑貨屋、呉服屋なども繁盛していたようです。

大正 7（1918）年に営業を開始した定山渓鉄道や、大正 13（1924）年に豊平川を初めて渡った路面電車が、豊平の街を通るようになると、物や人を早くたくさん運ぶことができるようになりました。それにつれて、物を加工するさまざまな工場などができ、街の様子も変化していきました。

②月寒地区

月寒は、明治 29（1896）年に軍の駐屯地となり、それをきっかけに商店街が形成されていきました。商店からは魚や豆腐など、さまざまな品物が軍に納められました。月寒あんぱんの元祖と言われる、碓井太七、本間荘四郎、大沼甚三郎氏たちは、明治時代からその名をはせ、軍への供給だけでなく、地方にも進出していたそうです。

大正 10（1921）年ごろの月寒本通（現在の国道 36 号）沿いには食料品店や日用品店、雑貨店の他、風呂屋や下宿屋などが軒を連ね、たくさんの人でにぎわいました。

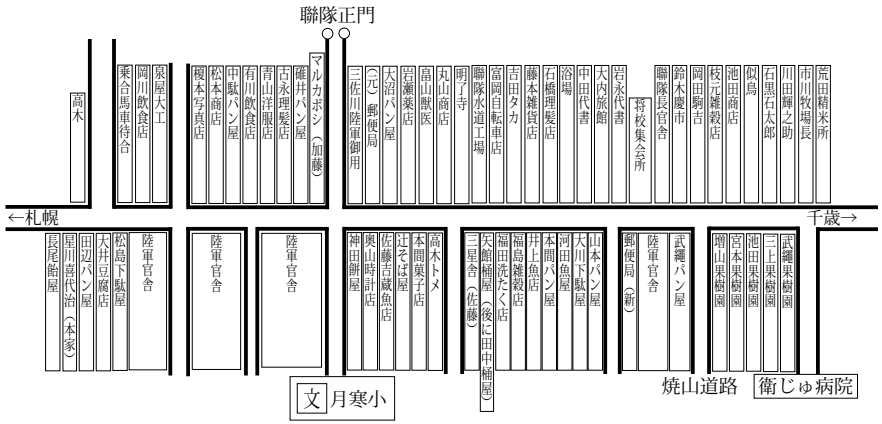

図 -1　大正 10 年前後の月寒本通（豊平町史第七章六、商工業より）

また、昭和 12（1937）年の日中戦争のころは、物資の統制によって自由販売の物品がほとんど出回らなくなり、商店個々の取引では商売が成り立たなくなりました。そこで、昭和 15（1940）年には、資本を出し合い商業組合を設立して、物資の円滑な取引を行うようになりました。

終戦後は、各地に商工会や商交会といった私設の組織もつくられました。また、昭和 28（1953）年には町の援助を受け、豊平町商工会という社団法人が結成され、中小企業発展のための策が取られるようになりました。

昭和 25（1950）年の 5 月には、現在の月寒体育館がある場所で札幌競輪が開始されました。それに伴い、選手のための宿泊施設として、旅館が次々と開業しました。そして、昭和 33（1958）年に月寒本通が拡張されると、2 階建てや 3 階建ての建物が立ち並ぶ大きな商店街へと発展していきました。

写真 -15　月寒周辺の国道 36 号（昭和 52 年）

③平岸地区

明治 26（1893）年ごろ、山形県から来た木村孫太郎氏と妻トイさんが、現在の平岸 3 条 14 丁目で、農業をする傍ら、食料品や日用雑貨を売るようになりました。これが平岸における商店の始まりといわれていますが、平岸の商業が本格的に発展したのは、昭和に入ってからとなります。

写真 -16　平岸通沿いの街並み
（昭和 52 年、平岸 2 条 7 丁目付近）

のどかな田園風景が広がっ

ていたこの地域も、昭和30年代に宅地化が進みました。しかし、当時、平岸通（平岸街道：国道453号の一部）沿いにあった商店は、酒や雑貨を扱う店、理髪店、市場、金物店などで、数はそれほど多くありませんでした。昭和46（1971）年には、平岸通も中央分離帯ができるなどして新しくなり、また、地下鉄の開通や札幌オリンピックの開催を契機として、通り沿いの商店街も整備されていきました。

平岸通沿いには、大小さまざまな店が軒を連ねており、国道36号沿いとともに、区内を代表する大きな商店街が形成されています。

8　工業

①月寒地区

れんが工場

開拓使は、発足当時かられんが作りに熱心で、函館付近で試作し、札幌で採れる粘土に着目し、利用しようとしました。明治12(1879)年には、当時の工業局が月寒に「家屋瓦試験焼場」を造りましたが、瓦が札幌で普及することはありませんでした。

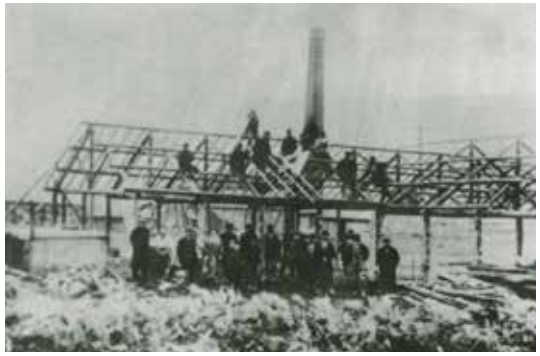

写真 -17　増築中の大久保レンガ工場
（月寒東3条11丁目、大正時代）

明治15（1882）年に、現在の月寒東3条11丁目付近で大久保レンガ工場が創立しました。この工場では、土管、れんが、かめ、瓦などを生産し、数十人の職人を雇い、月寒の産業の祖といわれました。また、明治20（1887）年には横山レンガ工場が誕生し、この2つの工場で作られたれんがや屋根瓦が、歩兵第25連隊の建物に使用されました。大久保レンガ工場は昭和20年代後半まで続きました。

②豊平地区

醸造業

豊平地区では、古くからみそ・しょうゆを作る醸造業が営まれていました。明治時代の記録にも、豊平の醸造業について記述が残っています。昭和の初期には、国道36号に沿って多くのみそ・しょうゆ工場が並んでいました。これらの工場は、戦時中の統制により工場の統廃合が行われたため、終戦後には、その多くが姿を消してしまいました。

ゴム工業

札幌におけるゴム工業は、豊平から現在の菊水地区に集中していました。主に長靴や短靴を製造する工場が多く、多いときには、10数軒の工場がありました。しかし戦後は、合併や移転、閉鎖などによりだんだん工場は減り、今では、姿を消してしまいました。

繊維工業

現在の豊平4条9丁目付近には、北海道製綱という会社がありました。この会社は、大正7（1918）年、札幌における繊維工場としては帝国製麻に次いで2番目につくられました。ここでは、マニラ麻・中国麻を原料として、ロープ、漁網などを製造していました。

当時の道内では、規模の大きい会社で、豊平町に住む人たちが、たくさん働いていました。また、労働者の大半が女性で、札幌で初めて労働組合の婦人部が誕生したのも、この会社です。

製鋼業

昭和12（1937）年、当時の豊平1条9丁目に野口製鋼所工場が設立しました。その後、昭和17（1942）年に、豊平製鋼所と改名し、戦時中には海軍省指定の軍需会社となりました。

終戦後は、株式会社豊平製鋼所となって、豊平に本社がおかれましたが、現在は豊平製鋼株式会社となり、西区の発寒鉄工団地に移っています。

③中の島地区

製氷業

昔は、中の島神社（中の島２条３丁目）から豊中公園（中の島２条１丁目）付近にかけて、水のきれいな５つの池がありました。大正 11（1922）年、山下友成（やましたともなり）氏は、冬期間その池に張る氷を採る仕事を始めました。氷が厚くなるには長い日にちがかかるため、ひと冬に２回ほどしか採ることができませんでした。

氷を採るためには、池に積もった雪を払い、大きなのこぎりで氷を切り出します。切り取った氷は、倉庫に運び入れ、溶けないようにおがくずに包み、馬車を使って札幌の中心部まで運んでいました。

札幌が発展するにつれて、豊平川の上流から流れてくる水が汚れてきたため、池からきれいな氷を採ることができなくなりました。そこで山下氏は、昭和 12（1937）年に、現在の中の島２条１丁目に工場を建て、地下深くから水をくみ上げ、札幌で初めて機械による製氷を始めました。当時、一日の出荷量は 15 トンほどで、主に魚屋、氷水屋、病院などに卸（おろ）されていました。

昭和 30（1955）年には、市内の製氷店が集まり、札幌製氷協同組合が設立されました。この組合では、機械を使って氷を製造しました。その結果、昭和 50（1975）年には、一日 80 トンもの氷を出荷できるようになり、さまざまな場所、用途で利用されるようになりました。

札幌製氷協同組合の工場は、平成８（1996）年からは別の会社に姿を変えて、しばらくの間は氷の生産が続けられていました。

写真 -18　豊平川製氷切り出しの光景（昭和初期）